

# 生活の伝承

5

発行者 民家園のつどい  
 会長 斎藤久一  
 発行所 福島市五老内町3番1号  
 福島市教育委員会  
 文化課内  
 民家園のつどい



べこぞうり作り

## 民家園回遊抄

室石塚、辺長屋門 古堤、松柏向、天競  
 粉倉西、烟、摘桑娘 飼養家族、上簇闇  
 澄説、淀無、鯉、水紋 商人宿、閑鉢瓶、浪  
 路傍、苔、祠村人、崇、暗、住土間、翁織筵、  
 半鐘視、邸、聞童謡 大構、名主、大柱鎮、  
 釣杓、彈、木合歡花 爐端、龜繕、赤臘緒、  
 田、稻、淡、戰馬、武士 奥間、迎主用達家、  
 室石橋、袂定渡、漬、闇、森吾妻、連山聳、  
 羽田牛稔

### 民家園回遊抄吟詠の読み方

室石塚の辺長屋門 古堤の松柏天に向いて競う  
 粉倉西の畑に桑摘む娘 飼養家族、上簇闇  
 発説は淀み無く鯉の水紋 商人の宿閑鉢瓶、浪  
 路傍の苔の祠村人崇ぶ 暗き住の土間に翁筵を織る  
 半鐘邸を視め童謡聞える 大構は名主なるか大柱鎮まる  
 田の稻は淡く戦ぎ馬の武士 奥の間に主迎える用達の家か  
 鈎瓶の水彈き合歓の花 炉端の嫗、赤い鼻緒を繕う  
 室石橋の袂に渡り賀の定め 森開けて吾妻の連山聳える

## 民俗の伝承

(13)

## 便所神の話

秋山政一

便所神（便所を廁ともいいましたから、便所神を廁神ともいいました）という神様がいらっしゃると知っている人が少なくなりました。しかし、年の暮れの正月の準備に「輪じめ」を便所に下げたり、「だんごさし」の時、二つほどつけた「だんご」の木を、便所の窓に下げたり、節分の「豆まき」に、ひいらぎの葉と、ひしこの頭を豆の木にさした「やつかがし」を便所の戸口にさしたりする家は、まだあると思います。

これは、私たちの祖先が、「便所」に、母屋の一部ではなくて別の役目があることを認めていたことになります。また、このことは、「便所」には家と違った何かがあることを示していると思わないわけにはいかないようです。

安達郡の岩代町に次のような行事がありました。それは、子供が生まれた家で七日目（ひとしちやとある）に、産婆さんが来て、十七センチ四方ぐらいの白紙を二つ折りに折つて三角にし、葦の棒にはさんで四本つくり、（これをお弊束といつています）。その後産婆さんは、赤ん坊の頭に新しい「おしめ」をかぶせて便所に入り、便所の四隅に先につくつておいたお弊束をさして、押んでから家に帰つて来るという

ものでした。

この行事は、「せつちんまいり」という名で知られています。行事の内容は、多少違っていますが、全国にもこの「せつちんまいり」という行事が残っています。それらは、大抵出生後七日目に行うことが多いことも注目されることです。

また、妊婦がよく便所掃除をすると、お産が軽くてすむと信じて実行したと茂庭地区には伝えられてきました。

また、皆さんに信達三十三觀音の巡拝によく詣でられる第十三番札所の松原寺觀音堂の側にある便所には、ちゃんと「便所神」がまつられています。桜本の桜本寺の便所にも「ウスサマ」がまつられていたといいます。そして、東湯野の民家にも「コゲガミ」として、便所に紙の神様が今もまつられてあるのです。

こう考えてみると、「便所」には「便所神」という神様がいらっしゃって、それを使う人々との間に、何か関わりがあることを知ることができます。

その神様は何という神様なのでしょう。  
『古事記』という古い書物には、日本の国を造られた伊邪那岐命と伊邪那美命のお二人で多くの神々をうんだとして、その中で伊邪那美命が「次に屎に成りませる神の名

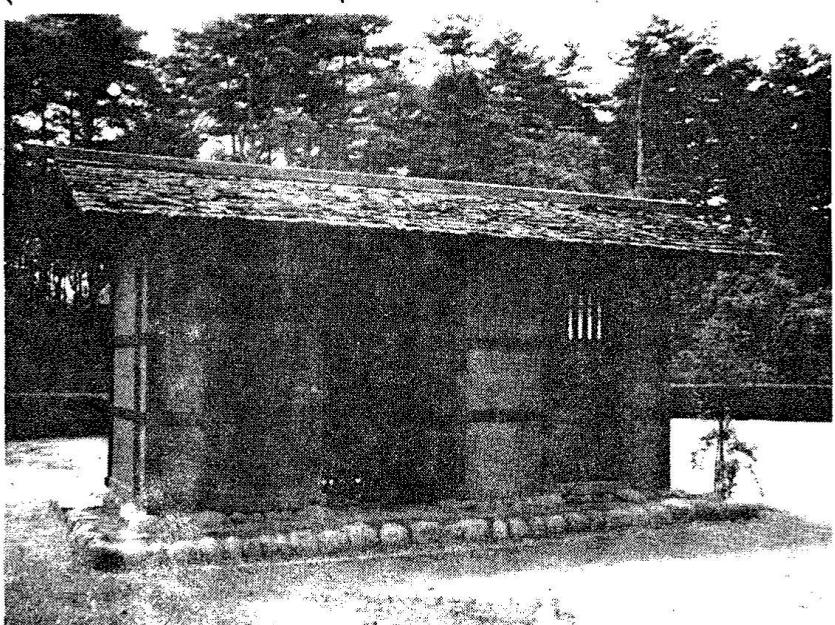
は、波邇夜須毘古神、次に波邇夜須毘賣命、次に屎に成りませる神の名は、彌都波能賣神」と書かれていて、糞から生じた神として、はにやすひこ、はにやすひめの二神と、小便から生じたという、みつはのめの神が伝えられているのであります。

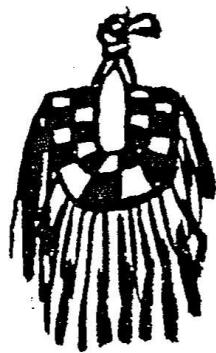
この三柱の神が、この書物の書かれたところから神様として礼拝されていたかどうかはわかりませんが、古い時代から、便所が普通の家と違った場所だったことだけはわかります。

その後、日本に仏教が入ると、書かれたところから神様として礼拝されていました。この仏様はどう

なん臭氣にもひるまず清淨にする仏として、いつの間にか「廁の神」として取入れられ、仏堂の便所の神は、ウスサマ明王であるといわれてきたようです。

こうみてきますと、私たちの国では古い時代から「便所」は、特別な理由は何かは、今ではわからなくなりました。しかし、便所が一番落着く所と笑い話に語られているように、今でもこ





これが落着ける場所なのではないでしょうか。  
「便所」が汚い所になつたのは、ずっと  
後のこととて、かつては、先にも書いておき  
ましたが、便所は「かわや」(川家)で、  
川の上から流してやつたといわれています  
ので、その場所は、きれいなものであつた  
と思います。

ただ、私たちの排泄したものを肥料など  
として蓄えるようになると、その場所が汚  
いものになつてしましました。

今、水洗便所になつて、嫌な思いをしな  
くてすむようになつたので、もう一度、こ  
の便所神のことを考えてみてはどうでしょ  
うか。

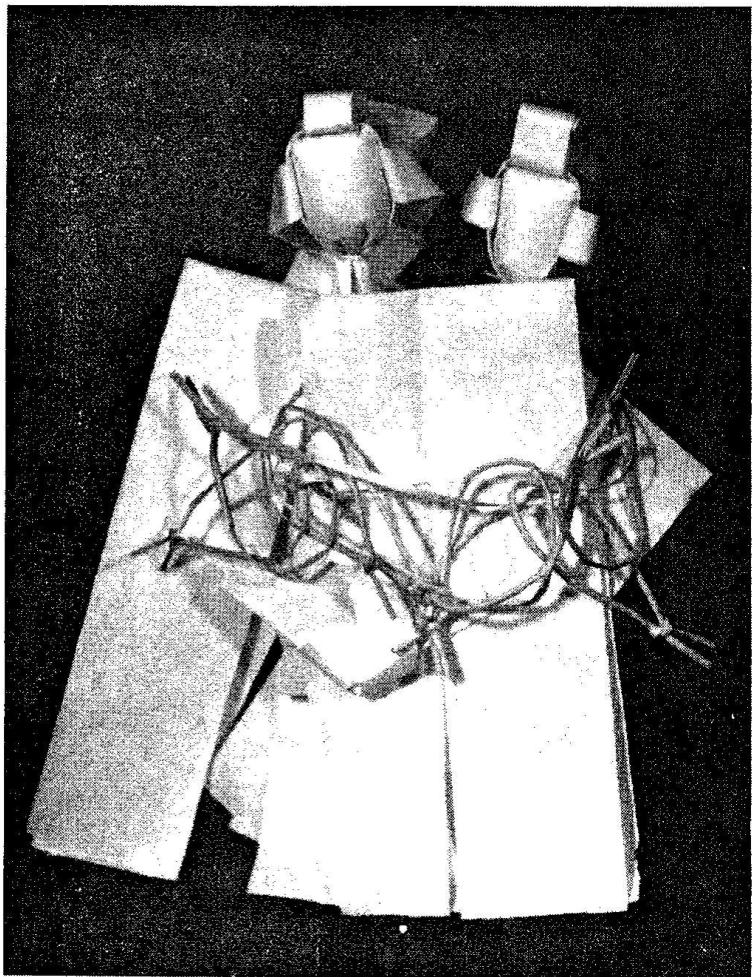
—附、家に造られる便所は廁という名  
があることは、先に述べた通りで  
ある。古い時代のお屋敷やお寺に  
は便所が四方にあつて、東にある  
ものを「東司」、西にあるものを  
「登司」、南にあるものを「西  
淨」、北にあるものを「雪隱」と  
呼んでいた。——

一九八九・二・一四

## 民俗の伝承 (4)

# 我が家の便所神

小 原 恒 七



便所に紙人形(便所神)をお供えするよ  
うになつてから、何年になるかはつきりわ  
かりませんが、父親の話では、祖父母が子  
供の頃にはすでにやつていたそうで、今か  
ら百五十年前位からやつていたことだけは、  
はつきりしています。そして、私の母親ま  
で受け継がれ、六年前までやつっていました  
が、母親が老いたので止めてしまいました。  
しかし、どこから伝わってきたかはわかり  
ません。

紙人形(便所神)は、小津軽(ハナ紙)  
で男と女の二体を作り、男が女にオンブす  
るよう重ねて縛ります。そしてミゴ(稻  
穂の下の部分)とカンゼンヨリで、それぞ  
れ約三センチ位の輪を作り、人形の肩にか  
けます。輪の数は、家族一人にミゴの輪一

つとヨリの輪一つの二つで、これをカンゼ  
ンヨリに通してかけました。

紙人形(便所神)は、家族が体の下の病  
気にかかるないように、ミゴとヨリの輪は、  
家族が目の病にかかるないように願いを込め  
てお供えするものだつたそうです。

お供えする日は、旧正月の十五日(小正  
月)早朝で、家族の女だけで、一枚のツケ  
木に小豆ガユをのせ、ローソクに火を灯し、  
一緒にお供えして拝みました。それから、  
小豆ガユだけを便所から持ち帰り、家族全  
員で少しづつ頂きました。なおこの日は、  
ローソクの火が消えるまで、用便するのを  
差し控えました。

## おキユ婆ちゃんに聞いた話

加藤春雄

私が子供の頃、おキユ様というお婆ちゃんより聞いたザット昔話。この婆ちゃんは、私の祖母とお茶飲み友達で、チヨイチヨイ訪ねてきて、世間話をしていた。今のようにテレビ、ラジオのない時代である。このお茶飲み話が情報交流源だった。子供の頃の思い出話や、転々と奉公先が変わつていった（他の家に働きに行かされた）話やら、子供の頃は子守りをさせられ、子供をおんぶして学校に行き、子供が泣き出すと、教室から出なければならぬ話やら、この婆ちゃんは話題が多かつたようだ。

この婆ちゃんから数多くの民話も聞いたが、五十有余年の歳月は、ザット昔に去つて、しどろもどろに記憶にあるだけ。今記憶に甦つてきたものを一つ記してみよう。

### 金兵衛爺様が首を取られた話

ザット昔のまたその昔、浅川に、金兵衛という爺様があつたそうだ。この金兵衛爺様は、薪を背負つて福島の町まで売りに行く事が生計をたてる仕事であつたそうだ。酒が好きで、帰りには一杯飲んで帰つて来る。時には一杯では足らず、つい羽目を外し、婆様より頼まれた生活用品を買ってくる事を忘れる事もしばしばあつたそうだ。こんな時、婆様の怒りは大変なものだったそう。

秋も深まつていく十月も半ばすぎ、金兵衛爺様は、柴木を背負つて福島の町へと山を下りて行つた。今の蓬萊園地の中を通り、根子町（今の清水町）に出て、伏拝坂を下つて行つた。

長年この商売をしているので、柴木はすぐ売れた。ヤレヤレと長い道中を背負つて来たので、喉がかわいて仕方がない。酒屋

真っ暗になつてしまつた。爺様が家に帰らなくてはならないと思った頃は、何時頃であつたろうか。大分時間が過ぎたようだつたそな。

ヤセ馬にくくりつけたマグロの頭を背負つて、伏拝坂を登り、根子町を過ぎてよいよ山道に入った。今のように人家は無く、灯りは見えない。半月が雲に隠れ、また出るといった情景は、何か一抹の淋しさを漂わせていたそな。

山道を登りつめた頃、爺様の全身に、サアッと寒気のよくなものが走つたそな。前方を見ると、殿様のお通りだ。何としたもんだと爺様は茫然として見ていると、大名行列がこちらに向つて来るではないか。

爺様がたまげて見つめているうちに、「下に、下に。」

と槍を持った足軽共が、金兵衛爺様の目の前まで来てしまつた。すると、一人の侍が

「無礼者、コラッ、金兵衛、首渡すか、渡さんか。」

と進み出た。

「へエー。」

と金兵衛爺様かしこまつて、「首は渡しますが、命だけはお助け下さい」と土下座してしまつた。しかし、

「エイッ。」

と一声、だんびらは振り下ろされ、ガダゴトと音がした。金兵衛爺様は首をはねられたものと思い込み、しばらくはその場に土下座したままだつた。

秋も深まつていく十月も半ばすぎ、金兵衛爺様が酒が好きな事をわかっているの

で、「一杯飲めや。」と酒を出した。

金兵衛爺様が、酒を出されるままに御馳走になり、よもやま話をしているうちに、

秋の日はすでに西山に入つてゐた。外は

いた。爺様が障子の破れから中をのぞき見ると、まだ婆様は起きていた。ウツラウツラしていると、表の障子の破れより、「首を取られて草葉の陰で見てゐるわい。」と表に出でみると爺様である。するとまた

「また酒を飲んできやがつたわい。」

「首を取られて草葉の陰で見てゐるわい。」

と氣を取り戻し、ヤセ馬がいない、マグロの頭がないのに気が付いたそな。婆様が言うのには、「この爺、酒ばかり飲んで来るから、狐に馬鹿にされたんだべ。」

爺様は夜が明けたら行つてみると決心して、そのまま寝て、夜が明けるのを待つて、出掛けたみたそな。すると、確かにマグロの頭が狐に食い荒らされた跡があつたそな。夕べの大名行列は、何を見たのであろうか。すると、道路のわきに里芋畑があり、一列に並んでいたそな。この里芋畑の行列が殿様のお通りに見えたのか。

昔は偉い狐がいたものだ。

私はこの度、医大病院に見舞に二回ばかり行つた。この丘の上より蓬萊園地を展望してみると、昔とは一変してしまつた風景にみとれてしまう。この民話の頃とは予想もつかぬ風景となつてしまつた。

# 要三やんの茶のみ話

## その一一

加藤重芳

「茶のみ話」は、きつい田畠の仕事の合間の、みんなで一服という一休みの時とか、食事がすんだあとでの昼休みなどに、その時の仲間のうちの誰かが話し手になつて、いつもその時々の話をすれば、みんなを臺ばせるものであつた。このくつろいだ大人たちの「茶のみ話」の間に、新しく仲間に入つた若者たちは、黙つてそれを聞きながら、大人になるための勉強をこつそりやつていたのである。だから、「茶のみ話」は、いつも若者たちが大人になるための教科書であつたし、語り手はその指導者であつた。

### (1) 要三やんのことわざ集

「天道 人を殺さず 弁当腹をへらさず  
ありがたい ありがたい」

「お天とさまは 昼間ばかりでてくる  
が お月様は 夜道でらしてくれつから  
有難いもナ」

「田植えと屋根葺は屁たれんな」

「やつまに三日休むと 一年能なしつて  
言われんぞ」

「夜道は 日が暮れねぞ」

「姉のこうのげ見えるうちに引込め」

「提灯とちんぽこは しわ見て買え」

「夜は一人歩きしんな 大事な用事の時は つげとの時みてえに二人で歩け」

「不言実行 付和雷同しんな」

「仕事しつとき仲間よんて掛け声なんのかけんな 人をあてにしつから掛け声かけんだ。一人でやつときは掛け声などいられねえ。」

「一人でできないこと 二人でできるわけがない 一人でできないのは 子供つくりばっかりだ」

「馬鹿の大足 まぬけの小足 丁度よいのは おらが足」

### (2) ろぶちにつかまる話

あのやろ、大ぼら吹きだから黙つて聞いてつとぶつ飛ばれそだから、オラ炉ぶちさつかまって聞いていた。ホレ、またはじまつたぞ。みんなぎつちり炉ぶちさつかまつてろよ。

「政府の言うことと菜っぱのこやしさ掛け声(かけ肥) ばつかしだ

ほら吹きを笑うことば――

### (3) 紬のふんどしの話

おこつて絹のふんどしをしめた人があつた。誰も気がついてもくれねえし、ほめてくれるものもいねえ。やたらと人に見せることもできねえ。見てももらいてえ。がまんできなくなつて、言つたど。

「絹のふんどしつうものは、つるつるしてすぐはずつちえ、具合悪いもんない。」

### (4) 何で食っている

「一服の時、誰かが言つたど

「いや、こう景気が悪ぐつては、とってもまんま食つてがんにえなあ。」

要三やん、お前は、何でまんま食つてんだけだ。」

「何で食つてるつて、おら茶碗と箸で食つてんぞい。」

要三やんが言つたど

よばれていつた時など、席に着くのにはなかなか決まらないことがある。そのためには末席にはなるべく大きい肴を配つておくといい。

### ● 末席から動きたくない時

主人(要三)「ホレ要三やん、ほだ隅っこにいねえで、いまつと先の方さ移つてくんちえ。」

要三「いや、旦那さん、大きい声では言わんにえげんぢょもない。ここんとこの肴、あつちよりでつかいんだわし。」

● どうしても動いてもらいたい時  
主人(要三)「○○やん、着めつけたら、それ持つて上つてくなんしょ。」  
○○やん「いや、そんじえわ…。」  
と上座に移る。



# やつちゃん

「やつちゃん」は、大正の初めに生れた。母が嫁入りして七年目というから、順調に身籠もれば明治時代に生れたはずである。しかし、やつちゃんが、今戸籍簿を見ながら指折り数えると六年目だ。これは昔、そめといつて、一年位婚家の手伝いをしながら、姑や婿さんのテストを受けたので、入籍は翌年となつたものと思う。母が、このことを嫌がつて実家に逃げ帰れば、「やつちゃん」は今この世にいない。

やつちゃんは、父の家で生れた。後年やつちゃんの妻は、その実家で長男を生み、長男の嫁は産院で、と変つた。産婆（助産婦）は平石のお仲婆さんで、父は、提灯をさげて雨水の流れくほんだ石那坂の道を産婆様を迎えたのだと思う。この道は、荷を着けた馬が通る時、歩行者は端によけなければならなかつた程だが、残し木の松の大木が並木のように両側に並び、幹の間から光がさして、正面の吾妻の山々が輝いて絵のようであつた。今は拡幅舗装され当時は「逃げ日」といつて、出産一年目の当時は、子供を産んだ家の屋根が見えない所で一晩を過ごした。やつちゃんの家でも、本家の嫁を泊めだし、やつちゃんも母に抱かれて、水原の母の実家に泊りに行つた。

やつちゃん以前の子供たちに「ちゃん」の愛称で呼ばれた人は少なく、ほとんどの子供たちは「やん」で呼ばれていたものが、

「やつちゃん」は、大正の初めに生れた。母が嫁入りして七年目というから、順調に身籠もれば明治時代に生れたはずである。

しかし、やつちゃんが、今戸籍簿を見ながら指折り数えると六年目だ。これは昔、そめといつて、一年位婚家の手伝いをしながら、姑や婿さんのテストを受けたので、入籍は翌年となつたものと思う。母が、このことを嫌がつて実家に逃げ帰れば、「やつちゃん」は今この世にいない。

どうして「ちゃん」となつたのだろう、とやつちゃんは考えた。

昔の新羅国（韓國）に十七の位階があつて、第一位が伊伐食（イバルチャン、角子ともいう）、第二位伊尺食（イチヨクチャ）ン）といったとある。蒸やんはやつちゃんの同級生で、男ばかり六人兄弟の末であつたが、一番上の兄を「デデやん」と呼んでいた。これも新羅国の位階で恐縮だが、その特別位に「大角子」（デカクハ）ン）「大太子」（デカクハ）ン）といふのがある。

申すまでもなく「子」は王であるから、この特別位は王家人達で、「大太」は、我

が国での太后と呼ばれるような尊称にあたる。

我が国と朝鮮半島とは古代よりのつきあいだが、明治四十年、韓国皇帝は日本の貴族となり、國は四十三年に日本の版図に編入された。その前年、朝鮮統監の伊藤博文が支那（中国）のハルピンで韓国青年に殺された、などのごたごたがあつたらしいが、

そんなことは、やつちゃんが後に小学校の国史の時間に先生から聞かされたことで、

當時、この「ちゃん」が子供の愛称ともなつた、などとは知る由もないし、やつ

ちゃんが、後年読んだ夏目漱石の「坊ちゃん」もこの頃の発表であつて、それ以前は、

上流社会の「お坊つちやま」であったのだろう。やつちゃん（家）の近くに大工さ

んが二軒あつたが、その子供たちは父親を

「チャン」と呼んでいたが、それは江戸時

## 丹治伸吉

代からである。

やつちゃんは四歳頃、三輪車をおとつて、あんに買つてもらつた。一本松（清水町の字）で蒸やんと遊んでいた時、若宮（浅川）の子供たち五、六人が突然現れた。

やつちゃんは自転車を放りだし泣きながら帰り、機織りしていた「おつかやん」に告げたが、お母やんはしんにふりして取り合はない。しばらくしてこわごわ行ってみると、三輪車だけがぼつんと残されていた。

その頃のわらしこの遊びは、兵隊ごっこと決まっていたようで、他部落のわらしたちと遭遇すると、実戦に入り、石合戦となるのが常で、それを知つてやつちゃんは、よその子供たちはおつかないもの、いじめられるもの、と思い込んでいたところが、口から湯気をふいている。

やつちゃんは現在あるが、時には近くの沼からとつたなまずを丸切りにして骨までやわらかくなるほど煮ていたこともあつたろう。

農家は、特に土間の広い東北の農家は、作業場兼用の住居である。籠の期の長いだけに生産の場であつた。暖をとる爐は、外とのつながりで土足で座れる。天井は煙突となり、煙は屋根をぬけていく。これも煙が通ることのによって、建材が強化されている。暗い納戸、柱のかくれた大壁など、それに説明のつく理由がある。これらは、長い生活の知恵の中から結晶となつて生まれてきた姿であろう。

横座において、煙にむせながら、古人の知恵と恩恵にむせびいたが、ふと、華やかな新開発とか、再開発とか、様々に姿をかえている街並などの現在の姿は、試行の錯誤にまた試行を重ねているのではないか。未来を追つて過去の無い、まるで砂上の楼閣のようではな

いかなど思つてみた。

爐の火はいつしかおきとなつて、すばかりは鎮火の神様のせいか、大人たちも

感

爐の火  
清野潔

潔

愛宕様のお祭りは、旧暦の六月二十四日（新七月二十六日頃）で宵祭りの方が人気があり、売り物屋も出て賑かだつた。

やつちゃんたちはお祭りが近づくと、缶詰の空かんを探しだし、穴を開けて釘をさしたり、持つところをつけたりして、カンテラ作りに余念がなく、互いに見せ合つて夜が来るのを待遠しく思つていた。そして夜になると、小さいローソクを点して、顔を輝かし駆け回つたものだ。この日ばかりは鎮火の神様のせいか、大人たちも

横座において、煙にむせながら、古人の知恵と恩恵にむせびいたが、ふと、華やかな新開発とか、再開発とか、様々に姿をかえている街並などの現在の姿は、試行の錯誤にまた試行を重ねているのではないか。未来を追つて過去の無い、まるで砂上の楼閣のようではな

いかなど思つてみた。

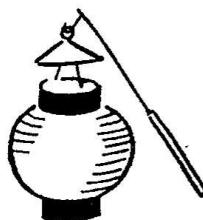
爐の火はいつしかおきとなつて、すばかりは鎮火の神様のせいか、大人たちも

小言を言わないが、口笛を吹くと怒られた。  
夜、口笛を吹くと、普通の日は泥棒が来て、  
祭りの日には神様が降りるからである。

不思議に思うのは、鎮守様の祭りにはこのカンテラが用いられないで、もっぱら花火であった。唐竹で一尺位の筒をつくり、ご丁寧に車までつけた大砲で、竹花火に火をつけて筒に入ると花火の竹が裂ける音が倍加して、筒先より火が噴き出すものである。神社の石垣の上にこれを据えつけてぶっぱなす、やつちやんらの得意や思うべしであった。本祭りの日は朝から祖父母や叔父、叔母、いとこなどがよばれて来るのを心待ちにして、何回も外に出て往来を眺めていたが、母も忙しい中にも同じ思いだつたろう。

女郎花などを供え新しい提灯に火を点して木戸口には迎火を焚き、新しい下駄を履いて墓参りをした。夜、道の両側に並ぶ家々の迎火が美しく燃えているのを見ると、本当に仏様が静かにその中を歩んで来られるような思いにかられたが、それは一時で、大はしゃぎのやつちゃんたちは、捲った尻を五軒の家の火に焙ると病気にならないなどと、とうみぎをかじりながら走りまわつ

やつちゃんは長男であつて、弟は八歳下だからまだ生れていない。室内には鐘馗様や神功皇后などの掛け物がつられて、机の上には、小さい鯉のぼりと金太郎、馬に乗つた秀吉などの小物が飾られているが、外には一本の幟も立つていなかつた。やつちゃんがこれを何とかしなくてはと考えたのは四歳位の五月節句のことである。本家には五、六本の武者幟が立ち、二階からもだらりと下げてある。その一枚を肩にかつぎ引摺りながら、家に向つて駆けだした。「オーイ、こつちの旗くれっから、それは持つてぐなあ。」



平成元年二月二十七日

卷之三

また火の話で恐縮だが、お盆も火の祭りであった。やつちゃんぜ（家）は、お父つあんが新宅に出たのだから仏様はない、と言えばそれまでだが、ちゃんと先祖様のお位牌を、福島の草野仏具店に頼み、箱に入れて戸棚の上に祀つてあつた。盆棚は吊らないが、やつちゃんが採つて来た桔梗や

先人の生活文化に思う

滝川次男

◆ 冻餅について

いつもながら冬になると、凍餅をつくつて保存食の一つとしてきた。例年は藁を使つて干してきたが、昨年は近代兵器のつもりで、ナイロンの紐を使ってみた。しかし、餅らしい餅にならず、失敗してしまつた。昔の人たちは、長い生活体験を通して食料のつくり方、保存の仕方にも、物や季節によつて、それぞれ工夫や創造をしてきたことを痛感し、改めて、先人の「生活の知恵」の素晴しさを見直した次第である。

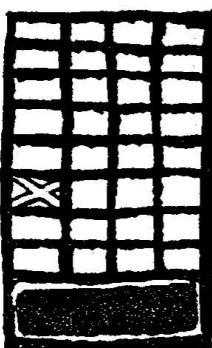
### ◇ 関税について

月をもとにした行事が数多く見られたが、庚申講もその一つであった。自分たちを守るために修養の場とし、更にお互いの語らいの場として、また、レクリエーションや食事をするための自治会という組織を、講の名の下として、

共にするなどの楽しみの場としてきた。現在で言うストレスの解消にも通ずる行事でもあつたように思われ、素晴らしい考えのあつたことを感じるのである。現在、吾妻公民館では、毎月旧の十六日に満月会を実

施しているか、これも陰暦を利用した先人の考え方、立っている証であると思う。農を主体に、手軽に活用のできる陰暦は、科学万能の現在でも、大変役立つているようである。

## ◇ 民家園について



これらのこととは、ほんの一部に過ぎないが、先人の長い生活経験から滲み出た「生活の知恵」でもあると思う。こんなことを探つてみると、郷土史の勉強の一つでもあると思うし、後世に伝えることも、私たちの務めでもあると思う。

ないなどの工夫も見られる。反面、設備、防火、衛生などに問題点も見られるようだが、「鬼門」などの言葉が使われていたように、日常生活の中での安全、衛生に対する、宗教的、学問的な面からの心くばりの深さが感じられるのである。

ままに復元され、数多く昔の面影を忍はせてくれている。その中から二、三のものを自分なりに探つてみた。まず玄関口の戸を開けると、物置にも、作業場にもなる広い土間の、鋪装された道路にも似た硬さに気がつく。粘土をたたいて固め、塩を混ぜて造る現代のテニスコートの造り方に似てゐるようだ。囲炉裏は土足でも暖がとれ乾かしたりでき、火棚をつけたり、工夫がみられる。また、煙は防腐、防虫、防寒と幅広く活用され、家の建築にはくぎを使わ



## 昭和63年度 民家園事業より

# 昔の食事

今年度初めて、三月五日に「昔の食事」として、昭和初期頃の「節句の祝い膳」を再現しました。その際、顧問の秋山政一先生から「食事の意味」についてのお話があり、出席者一同改めて食事について考えさせられました。そこでこの時の話をもとに先生に「食事の意味」について執筆していただきました。

## — 「晴れの膳」の再現 —

### 共食の意味

私たちの祖先は、食べ物には人間を生かしておこすばらしい力があるということを知つていきましたが、食物を食べる「食事」にも、とても大事な意味をみつけていました。

私たちの家では、ごく最近まで食事は家内中がみんな集つて食うことにしていました。

今でも「お父さんが帰るまで、もう少し待つて」と、夕食などは、家族全部がそろうまで食事をしないで待つてお家がありましたよ。

と、お父さんが偉いので待つていたのではないかたようです。

かつて神社やお寺へお参りに行くと、きまつて「お護符」という食べ物をいただいできました。貰つてきた者は、そのお護符がどんなにうまいものでも、どんなに小さくとも、必ず細かに分けて家内中でいただきましたし、結婚式の三三九度のお酒は、一人で仲よく飲み回しにしてきました。

「戦友」という歌にも「一本のたばこも一人で分けてのみ」とあって、たばこののみ回しなどもありました。

「陰膳」という言葉を知つている人は少なくなつたと思いますが、遠く旅行に出た者がいる家などで、旅に出た者のために毎日、食事の膳をつくつて箸をつけて供える風習がありました。旅に出た者にも家族と同じ食事をしてもらおうと考えたことなのです。

また、私の母などは朝ごはんの時、神さまに供えるじゃつきにごはんをあげました。それとは別に、鍋から飯を茶碗にわけて前に、鍋の蓋をとつてからへらをもつて中のごはんの真中のあたりをすくつてから蓋にのせ、のせたごはんの一箸分ぐらいのごはんをけずつて、鍋の中へもどしてから、お釜様に鍋の蓋のごはんを供えていました。せつかく蓋の上にのせたごはんをへらでかきもどしてやるのはどうしてだろうと思つてきましたが、私の母はお釜様に供えたごはんを私どもにも食わせようとしていたのにちがいありません。

また、今では無くなりました。近所に赤ん坊が生れると、きまつてお祝の品(布切れなどが多かった)を贈りました。赤ん坊の家では、二十一日目のまくらひきといふお祝の日に、おふかしをつくつて重箱一杯にしてお祝を贈つて下さった近所や親類の家に届けましたが、この重箱一杯のおふかしは、必ず隅の方に一粒ほどを残して、マッチ(つけ木などもありました)などをつけてお返ししてきました。重箱の隅のおふかしは、戻つてくるとふかし釜の中に入れて、よくかきませてから重箱につめて、また次の家へお返しにしたものなのです。こうして近所にも、めでたい家の食べ物を同じようにみんなに食べてもらおうとしました。

毎日の食事にも茶碗にわけてもらつたごはんを一口ほど残してやつて、もう一杯わけてもらうことになつていてお家もまだあります。

これらはすべて、みんなで同じ場所で同じ食べ物を食べることー共食ーが、私たちにとっても大切なわけがあつたことを残していることだつたのです。

ひよつとしたら、親子の断絶というのではなく、親と子が、同じ場所で同じ食事ができなくなりました。私たちの祖先は、そういうことを考えて共食をすすめてきたのかも知ません。

ひよつとしたら、親子の断絶というのではなく、親と子が、同じ場所で同じ食事ができなくなりました。私たちの祖先は、なつたためかも知れません。



「節句の祝い膳」の献立

今回の「節句の祝い膳」の献立は

・赤飯

・吸い物（鶏肉）

・煮物（長芋、人参、ごぼう、椎茸、にしん、凍豆腐）

・あさづきの白あえ

・豆かずのこ

・青菜のおひたし

でした。

## 体験学習「むかしの一日」

### 農家のくらし――

民家園では、今年度も夏休みの七月二十九日小学生を対象に「むかしの一日」という体験学習を実施いたしました。当日の参加者が、昔の農家の一日のくらしを実際に体験した感想を文集として残しましたが、その一部を紹介します。

福島市立清水小学校三年

安西

卓也

こうたことは、おてつだいです。

一番楽しかったのは、カイコをさわったことです。カイコはテレビでは見たことがあるけど、ほんもののカイコを見たりさわったり、「むかしの一日」ではできました。（さわったきもち、やわやわしていた）

むかしの一日には、今日はじめてきたんだけど、少しなれました。来年もきたいで

福島市立下川崎小学校三年

佐藤

剛

ぼくは、しようじりです。最後には、手がべたべたになりました。でも、それは

がんばったしるしになるかもしれません。ぼくたちがつだつた家は、お店です。そこの家のしようじを直すとすつきりしたようです。

福島市立三河台小学校四年

浅倉 聰美

きょうのたいけんがくしゅうは、とても楽しかったです。

おかげがおいしくて、つくっているときには、こうばしいにおいがぶんぶんにおつきました。できたときは、すごくいいおいがしました。そして、おじいちゃんがぐりをのむようにしてのむとおいしいといったから、のんでもたらす「くおいしくたべられました。

福島市立附属小学校四年

本間 篤志

ぼくの心の中で、一番いんしょにの

## 民家園から

私たちちは、古い祖先のくらしと共にそこに伝えられているさまざまな伝承について考えながら、民家園の年中行事に協力をしてまいりました。

今日ご覧くださいました民家園の行事運営にご参加下さる、新会員を募っております。

ふるってご入会をおまちしております。

会費 1,000円

年15回

民家園のつどい

おいしいおやつをもらつてたべたこと、ほかに、じいちゃんのたのしいむかしばなしをきいたことがとつてもとつてもたのしかつたです。今日の一日は、いつもよりとつてもみじかいような気がしました。

福島市立下川崎小学校五年

佐藤 栄治

ぼくは、ここのおひるのみそしるがあまりおいしいので、三ばいもおかわりして

「あつい、あつい。うまい、うまい。」と声を出しながら食べて、とてもおいしかった。来年もきてみそしるを食べたいです。

福島市立庭坂小学校六年

私は、いままでにやつたことのなかつたことを体験できて、この「むかしの一日」にきてよかったです。

はじめてべこぞりをはいて、はきに

いなあ。はだしのほうがいいなあとも思いました。自分のくつをはいたら、こっちの

福島市立吉井田小学校六年

渡部 さや香

近藤 香織

私は、いままでにやつたことのなかつたことを体験できて、この「むかしの一日」にきてよかったです。

最初はきんちょうして友達もできなかったけれど、後になつておもしろくなり良かつたです。学校で習つた縄文時代や大和時代などのくらしの様子もわかつたけども、体験学習で教わつたこともそれ以上にわかつたので、なわのしばり方、ふろしきのつつみかたなど役立てていきたいです。

福島市立吉井田小学校六年

渡部 さや香

近藤 香織

私は、この「むかしの一日」にきて本当に良かつたと思います。お世話をしてくれた方々、ありがとうございました。

私は、この「むかしの一日」にきて本当に良かつたと思います。お世話をしてくれた方々、ありがとうございました。

ほうがいいなあ。昔の人はよくはいていらされたなあとthoughtでした。

ひもの結び方も教えてもらつて、よくわかりました。はじめて食べた「こうせんが

し」もおいしかった。

# い ろ り

民家園の各民家・展示館に置いてあるノート、ここには、入園者のみなさんの民家園で感じたこと、覚えたこと、要望などが自由に書いてあります。そのいくつかを紹介します。(昭和62年11月～63年12月)

## 旧小野家自由ノートより

祖先の生きた足跡、生活道具を大切にし、民俗資料を通して、歴史を学ぶことが大切です。このように生活史を教える資料を備えつけて感謝します。大切に歴史を教えてください。

(十一月五日)

蚕室、わらだ、糸くり、い

りり、すべて幼い頃を思い出させます。そして何よりも、本日感動をおぼえたのは、十五夜様の供物です。おだんご、さといも、くり、すばらしい配慮です。今度子供達を連れ来たいと思います。

(九月二十七日)

## 旧篠原家自由ノートより

あらう、なつかしいハエ取り。昔はこれを使っていたもんだ。使い方について議論がわかった。

「麦汗をどちらにして入れるんだよ。」「いや水だけで、下の所にハエの好きなものを置くんだよ。」

(七月二十一日)

## 旧阿部家自由ノートより

商人宿に雨宿りさせていただきました。タバコのバットなど子どもの頃が偲ばれます。時々鳥威しが聞えます。

(八月二十四日)

祖父がこの家にて生まれ育ちました。子

## 旧阿部家自由ノートより

旧阿部家のこと。私は鳥取県米子市出身の阿部と申す者です。東北地方には、「阿部」この名前が多いとのことです。軒下から見た屋根の裏側がきれいで、木々の緑を美しく、ゆっくりと座つてほんやりしているのには、気持ちの良い所だと思います。

(五月十五日)

## 旧渡辺家自由ノートより

六年生で歴史の勉強をしていましたが、このような家を写真などで見るより、やっぱり本当に見ると、家の内部の様子までよくわかりました。ありがとうございました。

## 旧奈良輪家自由ノートより

このような家は不便ではあるが、人間性を守ってくれる。現代人のストレスを暖かく包んで解消してくれる。現代人の生き方、考え方をこの家は「私をよく観察して、反省しなさい」と言っているようだ。現代人は忙しすぎる。疲れている。しかし自分の真の豊かさのために何をやっているだろう。見当違いの価値観で動かされている面が多い。この家を見て本当の自分を取りもどそうではないか。

(七月八日)

## 旧菅原家自由ノートより

七十九年前の私の生家。訪れて見るに懐かし感無量に想はれる。何回となく訪れてきました。タバコのバットなど子どもの頃が偲ばれます。

(十一月二十一日)

## 展示館自由ノートより

家族全員で民家園の中を歩きました。幼い頃、同じような家に住んでいたことがあります。私が次々に思い出されました。馬がひいて、私がはどうぞいたしました。馬がひいて、暑い夏の日に押した「ころばし」のことなど……。また、戻つてみたい気もします。どうもありがとうございました。



## お 知 ら せ

三年もの長い間、民家園でお勤めいただいた矢葺久美子さんが、三月一杯でおやめになりました。誠に残念なことではありますましたが、その後任として、三月から菊田祐子さん、四月から佐々木春子さんにお勤めいただくこととなりました。新たな力として事務局共ども頑張りますので、よろしくお願いいたします。

## 編 集 後 記

子供たちの体験学習の感想等を読んで思ふことは、昔は昔、今は今というように、歴史的継承、発展の上に現在の生活がある。ということが欠落しているように感じられる。伝承とは、伝えられることだけではない。昔ながらの生活を知らない若者がしなければならないことは、単に昔の生活に触れるだけでなく、歴史的変遷を通して現在の生活を考察し、文化を学び伝えていくことでなければならないと思う。

(前田)